李賀「傷心行」の「落照」と「飛蛾」について

小田　健太

一　はじめに

中唐の詩人である李賀（七九〇〜八一六）の「傷心行」（呉企明『李長吉歌詩編年箋注』中華書局、二〇一二、巻六。全八句。以下『箋注』）は次のように詠じられている。

1咽咽学楚吟　　咽咽　楚吟を学び
2病骨傷幽素　　病骨　幽素を傷む
3秋姿白髪生　　秋姿　白髪生じ
4木葉啼風雨　　木葉　風雨に啼く
5灯青蘭膏歇　　灯青くして蘭膏歇きんとし
6落照飛蛾舞　　落照に飛蛾舞う
7古壁生凝塵　　古壁　凝塵生じ
8羈魂夢中語　　羈魂　夢中に語る

第八句に用いられている「羈魂」の語から、旅中にあったときの作であることはわかるが、いつの作であるかははっきりしない。李賀詩の大部分を編年した、『箋注』が「未編年詩」としてこの一首を位置づけるとおりである。

本稿で取り上げたいのは第六句である。清・王琦は「蛾」を「娥[2]」に作った上で、次のような注を付している。第五・六句の解釈に関わる部分を引こう[3]。

灯青蘭膏歇、灯久膏将尽、則其焔低暗作青色。落照飛娥舞、灯花謝落、因飛蛾舞触所致。……。『楚辞』、蘭膏明燭、華容錯些。王逸注、蘭膏、以蘭香煉膏也（灯青くして蘭膏歇きんとすとは、灯久しくして膏将に尽きんとすれば、則ち其の焔　低暗にして青色を作す。落照に飛娥舞うとは、灯花　謝り落つるは、飛蛾の舞いて触るるに因りて致す所なり。……。『楚辞』に、蘭膏の明燭、華容錯くと[4]。王逸の注に、蘭膏は、蘭香を以て膏を煉るなりと）。

第五句は、灯火が長い時間灯されているために油が尽きようとし、炎が小さくなり、暗くなって、青色を呈していることをいう。「灯花」とは、燃えた後の灯芯が花状に開いたもの。王琦注に拠れば第六句は、蛾が舞い飛んで触れることによって燃えた後の「灯花」が落下した情景を詠じているということになる。

明・曾益はやや見解を異にしている。同じく第五・六句に該当する注を引く[5]。

灯将歇、光逾青。落照非夕照。灯尽而光迴也（灯将に歇きんとして、光逾いよ青し。落照は夕照に非ず。灯尽きんとして光迴るなり）。

第五句の解釈は王琦と同様であるが、「落照」の語について曾益は、落下した「灯花」ではなく、火勢の衰えた灯火と捉えている。つまり、第五句と第六句の「落照」の語は、言葉を変えながら火勢の衰えた灯火のことを繰り返して詠じていることになる。この解釈は定説になっているといって差し支えない。例えば、劉衍『李賀詩校箋証異』（湖南出版社、一九九〇）は、「……灯油之将尽、飛蛾之撲灯火、頗有末日将臨之感」といい、徐伝武『李賀詩集訳注』（山東教育出版社、一九九二）は「今訳」において、「油灯里膏脂将尽、灯焔児発青、／昏暗的残光中、飛

蛾乱舞乱碰」と訳している。いずれの訳も「灯花」が落下したことを明示していないため、より直接的には曾益注を承けていることがわかる。邦訳においても、鈴木虎雄『李長吉歌詩集』（岩波書店、一九六一）が、「落照」に、「灯火の衰うるをいう」と注を付した上で、当該詩の第五・六句を、「灯の光は青くて蘭香のあぶらが尽きてきた、灯火が消えかかるあたりに蛾が舞いとんでいる」と訳出して以来、ほぼ大差のないものとなっている。*6

曾益が「落照は夕照に非ず」と注しているのは、「落照」の基本的な語義は落日だからである。『漢語大詞典』が「夕陽的餘暉」、夕陽の余光とのみ説明を加えるとおりである。実は、「落照」から火勢の衰えた灯火が連想できるのは、「飛蛾」の語があることによる。「飛蛾」が灯火とよくなじむ詩語であったために、「落照」から火勢の衰えた灯火への連想が容易になっているのである。それでは、李賀のように「落照」を火勢の衰えた灯火として用いた例は他にあるのであろうか。また、同じく第六句に詠じられている「飛蛾」の語は、李賀以前においてどのように用いられているのであろうか。李賀の用い方に創意は見出せるのであろうか。以下、これらの点に着目することで、一句の表現上の特質を明らかにしたい。

二　李賀以前の詩における「落照」について

詩において最初に「落照」の語が用いられているのは、周続之・陶淵明とともに「尋陽三隠」とも呼ばれた劉程之（三五四～四一〇）の「奉和劉隠士遺民」（『廬山略記』）である。*7『詩経』『楚辞』に「落照」の語は見られない。劉程之の詩はこの一首が残るのみである。

15永陶津玄匠　永く玄匠に津(わた)されんことを陶(よろこ)び

16落照俟虚昕　　落照　虚昕よりも俟なり

「永陶」は、後の例ではあるが、梁・王茂「答」（『弘明集』巻一〇）に、「方当積累来因、永陶慈誘（方当に来因を積累して、永く慈しみ誘かるるを陶ぶべし）」とある。「玄匠」は、傅亮（三七四～四二六）の「芙蓉賦」（『芸文類聚』巻八二）に、「伊玄匠之有瞻、悦嘉卉於中渠（伊れ玄匠の瞻る有りて、嘉卉を中渠に悦ばん）」とある。名工、すぐれた職人というほどの意味であろうか。「虚昕」も見慣れない語であるが、明け方であろうか。そうであるとすれば第十六句は、落日は明け方の太陽よりも大きく見えるということになろう。

次に「落照」の語が用いられる詩は、劉孝綽（四八一～五三九）の「太子洑落日望水詩」（『初学記』巻六。全一四句）である。

1川平落日迴　　川平らかにして落日迴かに

2落照満川漲　　落照　満川漲る

……　　……

7寒鳥逐査漾　　寒鳥　査を逐いて漾い

8饑鵜払浪翔　　饑鵜　浪を払いて翔る

9臨泛自多美　　臨み泛かべば自ら美多し

10況乃還故郷　　況や乃ち故郷に還るをや

蛾のような昆虫ではないものの、鳥や鵜といった鳥とともに「落照」が用いられている。また、落日に鳥たちが飛ぶ情景に「美」が見出されてもいる。

梁の簡文帝・蕭綱（五〇三～五五一）は、「落照」を三例用いている。まずは「和徐録事見内人作臥具詩」（『玉

台新詠』巻七。全二二句）を見ていきたい。「徐録事」とは、徐陵の父である徐摛（四七一～五五一）を指す。「内人」は宮女のこと。冒頭に次のようにある。

密房寒日晩　密房　寒日晩（く）る
落照度窓辺　落照　窓辺に度（わた）る

宮女のいる部屋の窓辺に落日の光が差し込むというのである。引用した句以降、宮女が仕立てた夜着のできばえの良さを褒めた上で、末尾に、「更恐従軍別、空牀徒自憐（更に恐る従軍の別れ、空牀　徒らに自ら憐まんことを）」とあるように、夫との離別を危惧する措辞で結ばれる。

同じく蕭綱の「大同八年秋九月詩」（『芸文類聚』巻二八。全一二句）と「大同九年秋七月詩」（『芸文類聚』巻二八。全四句）を挙げておこう。詩題からわかるように、どちらの詩も秋の景物を描写する中で「落照」が用いられている。

9 落照塹中満　落照　塹中に満ち
10 浮煙槐外通　浮煙　槐外に通ず
（「大同八年秋九月詩」）

3 晩風飄颻来　晩風　飄颻（ようよう）として来たり
4 落照参差好　落照　参差（しんし）として好し
（「大同九年秋七月詩」）

先の詩も含めて、「落照」と対になる語はさまざまであり、蕭綱が「落照」の用い方に意を払っていたことがうかがわれる。

朱超の「対雨詩」(『初学記』巻二。全一二句）は、落日が沈んで雨が降り出したことを次のように詠じている。冒頭の四句を引こう。

当夏苦炎埃　　夏に当たりて炎埃に苦しみ
習静対花台　　習静して花台に対す
落照依山尽　　落照　山に依りて尽き
浮涼帯雨来　　浮涼　雨を帯びて来たる

「炎埃」は真夏の暑さ。「習静」は、座禅のように心静かに修練すること。「浮涼」は軽く浮き上がるような涼気を指す。第三・四句は、焼け付くような落日が沈んで、涼しさを帯びた雨が降り始めたことを詠じている。

次に、太建中（五六九～五八一）に四十九歳で卒した張正見の「長安有狭斜行」(『楽府詩集』巻三五。全八句）を見よう。

5 檐高同落照　　檐高くして落照と同じく
6 巷小共飛花　　巷小さくして飛花と共にす

第五句は、ひさしが落日と同じ位置にあることを詠じている。ここまで見てきた詩において、「落照」の高さに着目した用法はなかった。

江総（五一九～五九四）の詩には「落照」が三例用いられている。次にまとめて掲げることとする。

5 軽飛入定影　　軽飛　定影に入り
6 落照有疎陰　　落照　疎陰有り

(「経始興広果寺、題愷法師山房詩」、『初学記』巻二三、全八句）

5驚風起朔雁　　驚風に朔雁起ち
6落照尽胡桑　　落照　胡桑に尽く

（「幷州羊腸坂詩」、『文苑英華』巻二八九、全八句）

1白露涼風吹　　白露　涼風吹き
2朱明落照移　　朱明　落照移る

（「詠蟬詩」、『芸文類聚』巻九七、全六句）

「経始興広果寺、題愷法師山房詩」と「幷州羊腸坂詩」は鳥とともに「落照」が詠じられている。「幷州羊腸坂詩」と「詠蟬詩」は、風と対にして用いられている。「詠蟬詩」は昆虫が主題となっている点で注目される。第一句は季節の推移を、第二句は一日の時間の移り変わりをそれぞれ詠じていて、蟬の短い命を端的に表徴していよう。詩の末尾の、「忖声如易得、尋忽却難知（声を忖（はか）れば得易きが如きも、尋ねんとすれば忽ち却って知り難し）」という句からもそのことがうかがえる。

盧思道（五三五～五八六）の「遊梁城詩」（『文苑英華』巻三〇九。全一六句）にも「落照」が見える。

9亭皐落照尽　　亭皐　落照尽き
10原野沍寒初　　原野　沍寒初む
11鳥散空城夕　　鳥は散ず　空城の夕べ
12煙銷古樹疎　　煙は銷えて古樹疎らなり

江総の「幷州羊腸坂詩」においても「落照」が「尽」とともに用いられていた。また、対ではないものの、「鳥」や「煙」が登場する例もこれまで見られたとおりである。

慧浄（五七八～六四五）の「和盧賛府遊紀国道場詩」（『古詩紀』巻一三八。全一二句）には、

7落照侵虚牖　　落照　虚牖を侵し
8長虹拕跨橋　　長虹　跨橋を拕（ひ）く

とある。虹と対にしたところに工夫が見出せる。窓から落日の陽が入り込むという第七句の情景は、例えば先に見た蕭綱「和徐録事見内人作臥具詩」の第二句に「落照　窓辺に度る」とあったのと発想が類似する。

唐代に入るとさらに用例数は増え、李賀以後の例も含めれば、『全唐詩』に百例ほどある。[8] しかし、そのほとんどすべてが落日を指しているようである。ここでは「傷心行」の第六句のように、「落照」と昆虫を取り合わせて詠じた例を挙げておこう。

まず、陳子良（五七五～六三二）の「夏晩尋于政世置酒賦韻」（『文苑英華』巻二一四。全八句）には、「落照」と「暮蟬」が対として詠じられている。

5長楡落照尽　　長楡　落照尽き
6高柳暮蟬吟　　高柳　暮蟬吟ず

楡のあたりに落日が沈んでいき、柳のあたりでは蟬が鳴いているというのである。

韓翃「送王光輔帰青州、兼寄朱侍郎」（『文苑英華』巻二七二。全八句）には、「蟬声」と「落照」が詠じられている。

5蟬声駅路秋山裏　　蟬声　駅路　秋山の裏
6草色河橋落照中　　草色　河橋　落照の中

対ではないが、耿湋の「晩夏即事、臨南居」（『石倉歴代詩選』巻五三。全一二句）にも「落照」と蟬が詠じられ

ている。第五句から第八句を引こう。

　　広庭餘落照　　広庭　落照を餘し
　　高枕対閑扉　　高枕　閑扉に対す
　　樹色迎秋老　　樹色　秋を迎えて老い
　　蟬声過雨稀　　蟬声　雨を過ぎて稀なり

秋の雨が降って蟬の声が聞こえなくなってきたことを詠う。先の韓翃詩と同じように「蟬声」の語が用いられている。これらの唐詩には、先に見た江総「詠蟬詩」からの影響がうかがえる。

　いずれの詩も対句中に「落照」と昆虫が詠じられており、一句に合わせて詠じた例はない。また、「落照」の用い方が異なるため、単純に比較することはできないが、蟬以外の昆虫と「落照」を詠じた例がない点にも「傷心行」第六句の特質を認めることができよう。

　ここまで、李賀以前の詩における「落照」の用例を概観してきた。「落照」は、この語が初めて詩に用いられた頃から落日を示しており、それ以降の詩においても同様であった。李賀のように火勢の衰えた灯火として「落照」を用いた例は皆無である。

　「はじめに」で引いた曾益注には、「落照は夕照に非ず」とあった。「落照」の語は一般的には落日を意味するため、「傷心行」においてはそうでないことに注意を喚起したのである。しかし、「落照」を基本義である落日として捉えた解釈がないではない。清・方世挙は次のように述べる[*9]。

　　落炤飛娥舞、言日未暝而月又起矣。娥是嫦娥（落炤　飛娥舞うは、日未だ暝れずして月又起こるを言う。娥は是れ嫦娥なり）。

「飛娥」の語を、羿（げい）の妻であり、月の異称でもある嫦娥に比定している。方世挙の解釈に従えば当該句は、落日が沈みきらず、かすかな明るさを残しているうちに月が昇った情景を描写しているということになる。この解釈は、馬少軽『李賀詩歌箋評』（河南大学出版社、二〇一二）によって「誤」りであるとされる。たしかに「傷心行」の文脈から考えて方世挙の解釈にはやや無理があるように思われる。第五句に詠じられている灯油の尽きようとする灯火の描写から、詩の背景が夜であることがわかるからである。方世挙の解釈が一般的にならなかったことから、李賀が「落照」に見出した新たな語義は、後の読み手にとって受け入れやすいものであったことが知れる。

それでは、李賀の他の詩において、火勢の衰えた灯火はどのように詠じられているのであろうか。それらの詩句を取り上げることで、「落照」の句の特質がさらに明確になろう。

三　李賀詩における火勢の衰えた灯火を示す詩句について

最初に、元和四年（八〇九）に詠じられた「昌谷読書、示巴童」（『箋注』巻一。全四句）を見ていくこととしよう。

1虫響灯光薄　　虫響きて灯光薄く
2宵寒薬気濃　　宵寒くして薬気濃（こま）やかなり

虫の音が響き、灯火の光は薄い。夜は寒く、煎じ薬が濃く立ち込めるという。曾益が、「虫響灯薄、宵寒薬濃、其愁病可知（虫響きて灯薄く、宵寒くして薬濃やかなるは、其の病に愁うること知る可し）」というように、病を患って愁いに沈む夜の描写となっている。「虫響」の語は、他の唐詩においても、灯火と取り合わせて詠じられる

ことがある。ここでは、姚合や賈島らと詩を贈答し合っていた周賀の「山居秋思」（『石倉歴代詩選』巻七三。全八句）を引いておく。

5泉流通井脈　　泉流れて井脈に通じ
6虫響出牆陰　　虫響きて牆陰より出づ
7夜静渓声徹　　夜静かにして渓声徹り
8寒灯尚独吟　　寒灯に尚独吟す

李賀の初句に用いられている「灯光」の語はそれほど珍しい詩語ではなく、虫と取り合わせて詠じられた例としては、姚係「楊参軍荘、送宇文邈」（『唐詩紀事』巻二七。全一二句）の第九・十句に、「灯光耿方寂、虫思隠餘清（灯光　耿として方に寂しく、虫思　餘清を隠す）」と見える。なお、灯火の形容に「薄」字を用いるのは、李賀以前の詩や以後の唐詩にも見当たらない。[*10]

元和六年（八一一）の作とされる、「謝秀才、有妾縞練、改従于人、秀才引留之不得、後生感憶、座人製詩嘲誚、賀復継四首」〈其三〉（『箋注』巻三。全八句）はどうであろうか。第三句から第六句には次のようにある。

灰暖残香炷　　灰は暖かなり　残香の炷
髪冷青虫簪　　髪は冷ややかなり　青虫の簪
夜遥灯焔短　　夜遥かにして灯焔短く
睡熟小屏深　　睡り熟して小屏深し

この詩は、謝秀才の妾であった縞練が他人に嫁していったことを嘲り誚って作った連作のうちの一首である。〈其三〉は、他所に嫁していった縞練が過ごす夜のようすを描写している。第五句では、灯火の形容に「短」字を

用いているが、こうした詠じ方は杜甫「夜宴左氏荘」（『杜詩詳註』巻一。全八句）以前の詩には見られないようである。頸聯に、

　検書焼燭短　　書を検して燭を焼くこと短く
　看剣引杯長　　剣を看て杯を引くこと長し

と詠じられている。左氏の所蔵する書物を閲するうちに蝋燭が短くなっていき、剣を見ては杯を引きつけてゆったり酒を飲むという。諸注ともに指摘がないようであるが、李賀は杜甫の詠じ方に学んだのかもしれない。李賀と同時期の元稹（七七九～八三一）や白居易（七七二～八四六）を始めとして、中唐から晩唐にかけて類例が増えていく[*11]。また、「短焔」や「短燭」といった詩語が形成されるようにもなっていくようである[*12]。

李賀の詩の第四句には「青」字が用いられていて、直接的ではないものの第五句の「灯焔短し」と結びつくようにも思われる。つまり、「青」字を背後に響かせながら「傷心行」に描かれていたような、小さな青い炎が自然と連想できるような構造になっているのではないだろうか。また、簪の形状ではあるが、「虫」字が用いられていることからも、「傷心行」第六句とのイメージの近似性が看取される。

次に「秋涼詩、寄正字十二兄」（『箋注』巻四。全二〇句）を引く。元和七年（八一二）に作られた詩である。この年の春、李賀は奉礼郎の職を辞めて故郷である昌谷に戻っている。例えば姚文燮が、「此賀家居寄兄正字之詩也（此れ賀家居して兄正字に寄するの詩なり）」というように、李賀が故郷から「正字十二兄」に寄せたものである。

5 露光泣残蕙　　露光　残蕙泣き
6 虫響連夜発　　虫響　連夜発（おこ）る
7 房寒寸輝薄　　房寒くして寸輝薄く

8迎風絳紗折　風を迎えて絳紗折る

昌谷での夜の点景を描いている。王琦は第七句の「寸輝薄」について、「寸輝、灯也。薄者、不明貌（寸輝は、灯なり。薄しは、明らかならざる貌）」と注を付している。「寸輝」の語は李賀以前の詩に見えない。李賀以後の唐詩を含めても、元稹「酬復言長慶四年元日郡斎感懐見寄」（『元氏長慶集』巻二二。全一六句）の第十一・十二句に、「椒花麗句間重検、艾髪衰容惜寸輝（椒花　麗句　重検間(しず)かに、艾髪　衰容　寸輝を惜しむ）」とあるのみである。詩題にあるとおり、この詩は長慶四年（八二四）の作であるから、李賀の方が早いことになる。「寸輝」は李賀の造語になる可能性があろう。また、灯火の形容に「薄」字が用いられることがなかったことについては先にも述べたとおりである[*13]。この詩には「虫響」の語も見えていて、「昌谷読書、示巴童」と発想を近くする[*14]。

元和十一年（八一六）の作である「秋来」（『箋注』巻五。全八句）の第二句には、「衰灯」の語が見えている。

桐風驚心壮士苦　桐風　心を驚かせて壮士苦しむ
衰灯絡緯啼寒素　衰灯　絡緯　寒素に啼く

「衰灯」は、王友勝・李徳輝『李賀集』（岳麓書社、二〇〇三）が、「衰灯、残灯・暗灯」というように、火勢の衰えた灯火のことである。李賀以前に用例がないようである。

『箋注』は「絡緯」について、『古今注』を引きながら、「絡緯、虫名、俗名『紡織娘』。崔豹『古今注』巻中、『莎雞、一名促織、一名絡緯、謂其鳴声如紡績也』」という。きりぎりす、あるいはこおろぎであるともいう。灯火と虫の取り合わせは本節で見てきた李賀の詩に共通する。

ここまで、李賀の詩に描かれた火勢の衰えた灯火について確認してきた。李賀は「寸輝」や「衰灯」といった、彼の造語になる可能性のある語を用いていた。また、灯火の形容に「薄」字を用いるのも、李賀以前の詩には見ら

れず、独自の詠じ方となっている。李賀は、自ら新たな表現を生み出したり、杜詩に学んだりしながら、さまざまに火勢の衰えた灯火を詠じている。「落照」の用い方もその一環であると位置づけられよう。ただし、ここまで本節で取り上げた李賀の詩において、既成の語に新義を付与した例はなかった。李賀の「落照」の用い方には、既成の詩語の意欲的な運用が看取されよう。

四　李賀以前の詩賦における「飛蛾」について

本節では詩賦に用いられる「飛蛾」の語について検討したい。

「飛蛾」の語が最初に用いられる詩は、張協（二六五？～三一五）の「雑詩十首」〈其一〉（『文選』巻二九。全一四句）である。

3 蜻蛚吟階下　　蜻蛚　階下に吟じ
4 飛蛾払明燭　　飛蛾　明燭を払う
5 君子従遠役　　君子　遠役に従い
6 佳人守煢独　　佳人　煢独（けいどく）を守る

「蜻蛚」はこおろぎ。「君子」「佳人」は、ここではそれぞれ夫と妻を指す。「煢独」は孤独のこと。一篇は、行役に出たまま帰らない夫を待つ妻の心情を中心として詠じられている。第三・四句ともに妻の孤独感を象徴的に示す措辞となっているのであろう。

鮑照（四〇五？～四六六）には、「飛蛾」を題とした、「飛蛾賦」（『鮑明遠集』巻一）がある。

仙鼠伺闇、飛蛾候明。……。凌燋煙之浮景、赴熙焰之明光。抜身幽草下、畢命在此堂。本軽死以邀得、雖糜爛其何傷（仙鼠は闇を伺い、飛蛾は明るきを候つ。……。燋煙の浮景を凌ぎ、熙焰の明光に赴く。身を幽草の下に抜き、命を畢えて此の堂に在り。本死を軽んじて以て邀え得て、糜爛すると雖も其れ何をか傷まん）。

「畢命」や「軽死」など、生死に関する語が用いられている。出処進退の難しさを比喩的に述べているのであろうか。「熙焰の明光に赴く」とあるように、炎の周りを舞う蛾が描かれている点は張協の詩と同様である。しかし、先に見た詩とは違って女性は登場しない。同賦のように題に「飛蛾」が用いられる作品は他に見当たらない。

謝朓（四六四～四九九）の「灯」（『玉台新詠』巻四。全八句）にも「飛蛾」が見えている。

5飛蛾再三繞　　飛蛾　再三繞り
6軽花四五重　　軽花　四五重なる
7孤対相思夕　　孤り対す　相思の夕
8空照舞衣縫　　空しく照らす　舞衣の縫

蛾がぐるぐると飛びまわり、火花が散るように灯火が燃えることをいう。第七・八句は、舞いのための衣装を身につけた女性が相手を思いながら灯火に照らされているようすを描写している。孤独な女性と「飛蛾」が取り合わせて詠じられているところに張協「雑詩十首」〈其一〉との共通点がある。

次に、何遜（四七二？～五一九？）の「秋夕歎白髪詩」（『何水部集』。全二六句）はどのように詠じられているであろうか。第十九句から引こう。

月色臨窓樹　　月色　窓樹に臨み
虫声当戸枢　　虫声　戸枢に当たる

飛蛾払夜火　　飛蛾　夜火を払い
墜葉舞秋株　　墜葉　秋株に舞う

「戸枢」はとぼそ。月光が窓辺の樹木に注ぎ、虫の鳴く音が戸口から入り込む。蛾は夜の灯火を払うように飛び、落ち葉は樹木の根本に舞う。第二十一句はもとより、第二十句には虫の音が詠じられていることから、張協「雑詩十首」〈其一〉を承けていることは明らかである。ただし、「秋夕歎白髪詩」に孤独な女性のイメージはないため、その点に何遜の独自性を認めることができよう。第二十二句の「舞」は李賀の当該句にも用いられていた。直接的な影響関係にあるとはいえないかもしれないが、両者とも蛾や落ち葉のようにひらひらと空中をただようものに対して「舞」を用いているのである。

庾信（五一三～五八一）の「対燭賦」（『庾子山集』巻一）にも「飛蛾」が用いられている。

傍垂細溜、上繞飛蛾。光清寒入、焰暗風過（傍らには細溜垂れ、上には飛蛾繞る。光清らかに寒さ入り、焰暗くして風過ぐ）。

蝋が溶けて垂れ、蛾がめぐっている。灯火の光は清らかで寒さが忍び寄り、風が吹いて炎が暗くなるという。賦の冒頭には、「竜沙雁塞早応寒、天山月没客衣単（竜沙　雁塞　早に応に寒かるべく、天山　月没して客衣単なら ん）」とあって、妻が戦役に出かけて薄い「客衣」を羽織っているであろう夫を想像していることがわかる。「対燭賦」における「飛蛾」も孤閨の女性が過ごす夜の情景の一部となっている。

以上、唐代以前の詩賦に用いられた「飛蛾」の用例を列挙してきた。用例が多いとはいえないが、すべて灯火の周りを飛ぶ蛾として詠じられているのは注目に値する。こうした情景は「飛蛾」の語を用いる際の固定的なモチーフとなっていたのであろう。唐詩においても同様の用い方が盛行することとなる。

『全唐詩』に「飛蛾」の語は、十二例を数えるが、そのうちのほとんどが灯火とともに詠じられている。李賀以前の用例を中心に確認していこう。

まず、徐彦伯（?～七一四）の「春帰」（『石倉歴代詩選』巻二六。全一二句）には次のようにある。

3暗梁聞語燕　暗梁に語燕を聞き
4夜燭見飛蛾　夜燭に飛蛾を見る
……　……
9有使通西極　使いの西極に通ずる有りて
10緘書寄北河　緘書　北河に寄す
11年光只恐尽　年光の只尽きんことを恐る
12征戦莫蹉跎　征戦　蹉跎たること莫かれ

詩の末尾は、時間の過ぎ去ってしまうのが恐ろしいから、どうか戦の中で時を過ごしてしまうことがないようにと述べて、妻が夫の帰還を望むことを詠じているのである。張協や謝朓の例のように、孤独な女性の寂しげなようすを、「飛蛾」を用いて象徴的に表している。

薛維翰の「春夜裁縫」（『唐詩紀事』巻二〇。全四句）も、「春帰」と同じく春の夜を背景として詠じられている。

珠箔因風起　珠箔　風に因りて起こり
飛蛾入最能　飛蛾　入ること最も能（よ）くす
不教人夜作　人をして夜作せしめず
方便殺明灯　方に便ち明灯を殺（けず）る

「珠箔」は珠簾に同じで美しいすだれのこと。風が吹いてすだれが巻きあがり、蛾が舞い込みやすくなった。蛾がうるさくて裁縫もできないので灯芯を削ったというのであろう。詩題に「裁縫」とあるが、空閨を守る孤独な女性であるかははっきりしない。

杜甫（七一二～七七〇）の「写懐二首」〈其二〉（『杜詩詳註』巻二〇。全二四句）は、『杜詩詳註』が、「次歎人情之迫於名利者（次は人情の名利に迫る者を歎く）」というように、名利を求める者たちに対する杜甫の述懐である。末尾近くに「飛蛾」が用いられている。

19君看灯燭張　　君看よ　灯燭張らば
20転使飛蛾密　　転た飛蛾をして密ならしむるを

『杜詩詳註』は二句について、「飛蛾赴燭、譏其滅身而不顧也（飛蛾　燭に赴くは、其れ身を滅して顧みざるを譏るなり）」という。灯火に群がる蛾は名利を求める者たちの象徴として詠じられていることになる。第二十句に対して『杜詩詳註』は張協の句を引いているが、「飛蛾」が灯火に集まることに譏刺の意味を込めたのは杜甫の創意になろう。

王建（七六六？～八三四？）の「邯鄲主人」（『王司馬集』巻一。全一六句）には次のようにある。

3飛蛾繞残燭　　飛蛾　残燭を繞り
4半夜人酔起　　半夜　人　酔起す

尹占華『王建詩集校注』（巴蜀書社、二〇〇六）が、「此詩写自己投宿邯鄲客館、酒女贈其綺被禦寒、使作者非常感動」と述べるように、宿泊した先の女性に防寒着を贈られたことを契機として詠じられている。第三句は宿の室内の描写であり、第四句の「人」は王建自身を指すことになる。女性が登場する点において、六朝期の用例の延長

線上にある。

元和十五年（八二〇）の進士である施肩吾の「効古興」（『唐詩紀事』巻四一。全一〇句）はどのように詠じられているであろうか。

5南軒夜虫織已促　　南軒の夜虫　織ること已に促く（はや）
6北牖飛蛾繞残燭　　北牖の飛蛾　残燭を繞る
……　　……
9不知歳晩帰不帰　　歳晩　帰るや帰らざるやを知らず
10又将啼眼縫征衣　　又啼眼を将（もっ）て征衣を縫う

戦に行った夫の帰りを待つ妻を詠じる際に「飛蛾」が用いられた詩としては、張協「雑詩十首」〈其一〉や徐彦伯「春帰」のような前例があった。この詩もその系譜に連なる用例である。先の王建詩と同じく「残燭」の語が用いられている点にも注意しておきたい。ここまで確認してきた「飛蛾」を用いた詩にあっては、「明灯」「夜火」「夜燭」などの語が併せて詠じられていたが、火のかすかに残った灯火はなかったからである。

張祜（七九二～八五三）の「贈内人」（『万首唐人絶句』巻四三。全四句）の転・結句には次のようにある。

斜抜玉釵灯影畔　　斜めに玉釵を抜く　灯影の畔（かたわら）
剔開紅焔救飛蛾　　紅焔を剔開して飛蛾を救う

尹占華『張祜詩集校注』（甘粛文化出版社、一九九七）によれば、ここでの「内人」は宮女を指す。宮女が釵を外して灯の中にかざし、蛾を火から救い出したというのであろう。

ここまで、李賀以前の例を中心に、唐詩における「飛蛾」の語の使用状況を見てきた。李賀以降の例を通覧して

も、「飛蛾」と灯火がともに詠じられていないのは、わずかに李商隠（八一三?～八五八）の「鏡檻」（『李義山詩集』巻中。全三二句）のみである。第十五・十六句に、「斜門穿戯蝶、小閣鎖飛蛾（斜門　戯蝶穿ち、小閣　飛蛾を鎖ざす）」とある。劉学鍇・余恕誠『李商隠詩歌集解』（増訂重排本、中華書局、二〇〇四）は、「斜門」の句については、「実写景物」と述べて実景と捉えているの対し、「飛蛾」の語については、「飛蛾喩幽居女子」といって、比喩的な用法であることを認めている。そうであるとすれば、実景としての「飛蛾」はすべて灯火と取り合わせて詠じられていることになる。仮にそうでなかったとしても、李商隠は李賀以降の詩人であるから、李賀の時点での「飛蛾」の用法は限られていたことになる。

灯火のまわりを飛ぶ蛾のモチーフは、張協の「雑詩十首」〈其一〉を嚆矢として、これが唐詩に影響を与えたものであろう。李賀以前の詩に用いられた「飛蛾」は、灯火の周りを飛び回る蛾として詠じられている点でほぼ共通しており、「傷心行」の「落照」の句も同様に解釈するのが穏当である。ただし、「飛蛾」の語には女性のイメージが付随することが多いのに対し、「傷心行」にはそうしたイメージがないことから、その点に李賀の独自性があると考えられる。

五　おわりに

ここまで、「落照」と「飛蛾」の語を取り上げて、「傷心行」第六句の特質を明らかにしてきた。

「落照」については、この語に新義を見出したところに特質が看取されることは先述したとおりである。既成の語に新たな語義を見出すとき、その新義は基本義から類推することができるものでなければ、読み手の理解を得ら

れないであろう。一般的に、既成の語に自己完結的な突飛な新義を付与するのは避けるべきである。李賀は「傷心行」において「落照」の語に火勢の落ちた灯火という新義を見出したのであったが、方世挙を除いたおおむねの解釈はほぼ一致している。つまり、李賀は無理のない類推の範囲で既成の語に新義を見出したといえるのである。過去になかった新たな表現を追求することは尊重されるべきであるが、それが詩意を読み取る際の障害となることもあろう。李賀は、新たな表現の追究と読み手の想定という詩作に欠くことのできない二つの側面に気を配りながら「落照」の語を用いたといえるのではないだろうか。また、詩語の語義は常に一義であるとは限らない。李賀は「落照」の基本義が落日であることは当然認識していたはずである。「傷心行」の「落照」が火勢の落ちた灯火を指しているとしても、落日のイメージを完全に脱落させたのでは、かえって詩の奥深さを見過ごすことになるように思われる。風雨に葉が散るもの寂しい秋の夜に、うらぶれた部屋の中で病を患った李賀は灯火を見つめている。その火の中に李賀が落日の燃えるような明るさを想像しなかったとはいい切れない。そうであるとすれば、灯火の周りを舞う蛾という伝統的で微視的なモチーフの中に、雄大な落日のイメージを重ねたところに、李賀独自の見立てがあったのではないだろうか。

「飛蛾」の語についても一言したい。李賀以前の詩において「飛蛾」の語を用いる場合には、女性のイメージが付随することが多かった。それに対して「傷心行」には、そのようなイメージはない。「飛蛾」の語を語り手の境遇を詠じる詩句に応用することで、甘美な叙情性を詠い上げることに成功しているように思われる。

清・黎簡は、「詩是無益、知其不可為而為之、如灯蛾之赴火、灯熄而猶飛舞也（詩は是れ無益にして、其の為す可からざるを知りて之を為すは、灯蛾の火に赴きて、灯熄（や）みて猶飛舞するが如きなり[15]）」と述べている。李賀が、無益であることを知りながら詩作を続けるのは、灯火が消えたのちも蛾が舞い飛ぶようなものだという。ここでの

「益」とは現世的な利益であろう。確かに、科挙受験を阻まれた李賀にとって*16、詩作は必ずしも栄達をもたらすものではなくなっていたかもしれない。いわば詩作そのものが目的化することで、従来の表現を乗り越える自由を李賀は手にしたのではなかったか。思うような官途に就けなかったことは、李賀に大きな不遇感を与えた。李賀にとってそれは間違いなく不幸なことである。しかし、それによって表現はかえって闊達になり、前代の規範的な表現から抜け出ている。個々の表現の分析を抜きにして軽々に判断することはできないが、詩作そのものが目的化することで、独自の表現に到達しているのは、李賀詩全体の傾向でもあるように思われるのである。

---

*1 劉衍『李賀詩校箋証異』（湖南出版社、一九九〇）は、元和七年（八一二）秋の作であるとし、王友勝・李徳輝『李賀集』（岳麓書社、二〇〇三）は、元和五年（八一〇）から元和八年（八一三）の間の作であるとする。

*2 本論では、「蛾」と「娥」の異同については特に取り上げることはしない。両字は字形や発音が類似しているため、部分的には通用されていた可能性もあるからである。

*3 引用は『三家評注李長吉歌詩』（中華書局、一九五九）所収、『李長吉歌詩王琦彙解』巻二に拠る。

*4 王琦の引用は、「容」を「鐙」に作るか、あるいは「錯」を「備」に作るのが正しい。

*5 引用は楊家駱主編『李賀詩注』（世界書局、一九六四）所収、『昌谷集』巻二に拠る。

*6 斉藤晌『李賀』（漢詩大系一三、集英社、一九六七）、比留間一成『李賀詩集』（中国の詩集六、角川書店、一九七二）、原田憲雄『李賀歌詩編一　蘇小小の歌』（東洋文庫、一九九八）を参照した。なお、荒井健『李賀』（中国詩人選集一四、岩波書店、一九五九）、黒川洋一『李賀詩選』（岩波文庫、一九九三）に「傷心行」は採られていない。

*7『漢語大詞典』の「落照」の項には、初めに梁の簡文帝・蕭綱（五〇三～五五一）による「和徐録事見内人作臥具詩」（『玉台新詠』巻七）の初聯である、「密房寒日晩、落照度窓辺」が載せられているが最古例ではない。

*8『全唐詩』の検索には、「中国哲学書電子化計画」(http://ctext.org/zh) を用いた。以下、同様。

*9 引用は『李賀詩歌集注』(上海人民出版社、一九七七)所収、『李長吉詩集批注』に拠る。

*10 ただし、「戦地晴輝薄、軍門暁気長」(楊巨源「贈隣家老将」、『唐詩紀事』巻三五)や、「扶桑寒日薄、不照万丈心」(元稹「諭宝二首」〈其二〉、『元氏長慶集』巻二)、「峨嵋山下少人行、旌旗無光日色薄」(白居易「長恨歌」、『白氏長慶集』巻一二)のように、光に対して「薄」字を用いた類例はある。

*11 例えば、元稹「和友封題開善寺十韻」(『元氏長慶集』巻一三)には、「灯籠青焰短、香印白灰銷」とあり、白居易「不睡」(『白香山詩集』巻一九)には、「焰短寒缸尽、声長暁漏遅」とある。

*12 例えば、李鹹用「贈陳望尭」(『全唐詩』巻六四六)には、「秋螢短焰難盈案、隣燭餘光不満行」とあり、唐彦謙「蒙谷山」(『全唐詩』巻八八五)には、「交朋漫信文成術、短燭瑶壇漏満壺」とある。

*13 先述した「昌谷読書、示巴童」も含めると李賀詩全体には「薄」字が十五例用いられている(唐文・尤振中・馬恩雯・劉翠霞編『李賀詩索引』斉魯書社、一九八四に拠る)。ここで取り上げた詩以外にも李賀独自の詠じ方が施されていることも予想されるが、本論の趣旨から外れるため、稿を改めて検討したい。

*14 寒い室内と灯火を一句に仕立てた例として、杜甫「夜」(『杜詩詳註』巻二〇)の「絶岸風威動、寒房燭影微」が意識されていたかもしれない。また、李群玉「雨夜呈長官」(『李群玉詩集』巻上)には、「孤灯冷素豔、虫響寒房幽」とある。李賀の詩からの影響が考えられる。毛麗珠『李群玉詩歌探微』(秀威資訊科技股份有限公司、二〇〇七)は、「響」と「幽」の対照の鮮やかさを指摘するものの、羊春秋『李群玉詩集』(岳麓書社出版、一九八七)とともに、李賀詩からの影響は述べられていない。

*15 引用は『李長吉集』(福建人民出版社、二〇一一)に拠る。

*16「傷心行」が作成されたのは、科挙の受験を阻まれた、いわゆる「諱事件」よりも後であると推測される。注①を参照。

(筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程)